よくわかるキリスト教講座　　2006.6.29

芦名　定道

世界教会史から窺うキリスト教

第３回　近代・現代
── 内村鑑三と多元的世界の中のキリスト教会 ──

1　キリスト教の歴史を学ぶということ

・マクロな動き、ダイナミックな活動
　　東アジアのキリスト教、本格的な多元的世界との遭遇、宗教改革は継続する
・日本のキリスト教の可能性

2　欧米の宗教からアジアの宗教へ

・キリスト教の光と影
・アジア：宗教的多元性、宗教文化の多層構造
・マイノリティとしてのキリスト教
　　古代のキリスト教との類似性
・国家とキリスト教、民族とキリスト教

3　内村鑑三　（1861（万延 2）－ 1930（昭和 5））の回心

三度の回心

1877:札幌農学校入学、「イエスを信ずる者の誓約」に署名
1878:受洗（18 才）
1882:札幌独立教会設立に参加
1884:浅田タケと結婚・離婚、私費にて渡米、鹿鳴館時代始まる
1885:エルウィン精神療養所に看護人として勤務。アマスト大学選科生として入学。
1886:学長シーリーの感化を受けて回心を経験（26 才）
1888:北越学館（新潟）に赴任・宣教師団と衝突して帰京
1889:横浜加寿子と結婚、明治憲法発布
1890:第一高等中学校嘱託教員、教育勅語発布
1891:不敬事件(1 月 9 日、31 才)、妻死去
1892:大阪の泰西学館に赴任、岡田シズと結婚
1893:泰西学館辞任・熊本英学校赴任・京都へ、著作（『求安録』）に没頭
1897:『万朝報』英文欄主筆、東京へ
1894:日清戦争
1898:『万朝報』退社、『東京独立雑誌』創刊し主筆
1899:義和団事件
1900:『東京独立雑誌』廃刊、『聖書之研究』創刊（40 才）、治安警察法公布

1901:『無教会』を創刊、足尾鉱毒事件のために奔走、「理想団」結成し、社会改良運動につとめる
1902:日英同盟
1903:『聖書之研究』『万朝報』に戦争絶対反対論・日露非開戦論を掲載、『万朝報』客員を辞す
1904:日露開戦後も非戦論を提唱
1906:南満州鉄道株式会社設立
1910:日韓併合、『白樺』創刊、大逆事件
1912（明治 45 年）:ルツ子永眠（復活信仰を明確に把握、51 才）
1913（大正 2 年）:『デンマルク国の話』
1914:第一次世界大戦
1917:ロシア革命
1918:基督再臨運動始まる、米騒動
1920:大恐慌
1921:原敬暗殺
1923:有島武郎自殺、関東大震災
1925:治安維持法公布
1926（大正 15、昭和元年）
1928/29:共産党大検挙、世界恐慌
1930:永眠(3 月 28 日)、浜口首相狙撃
1931:満州事変

・日本の代表的なキリスト者
・人間は変わり得る（神にあって）
　　教育、ジャーナリズム、社会実践、宣教・聖書研究
　　回心は一度ではない、「実験」的信仰
・罪の問題、キリストの贖罪の意味

「それ故に、実のところ、私の動機は自己本位だった。そしてその後に苦い経験の数々により、利己主義はどんな形をとって現れようとも悪魔のものであり、罪であることを学ばねばならなかったのである。完全な自己犠牲と全面的な自己忘却に他ならぬ慈善の要求に応じようと努力するにつれ、生来の利己心はあらゆる恐ろしい罪悪となって立ちあらわれる。」

４　無教会とは

・教会（教派）の一つ
・近代的なスピリチュアリズム

「『無教会』は教会のない者の教会であります。すなわち家の無い者の合宿所とも云ふ

べきものであります。すなわち心霊上の養育院か孤児院のようなものであります。『無教会』の無の字は『ナイ』と訓むべきものでありまして、『無にする』とか『無視する』とか云う意味ではありません」

「教会なきキリスト教が未来のキリスト教である」「ルーテルの改革を改革する改革」「日本的キリスト教とは日本人が外国の仲人を経ずして真に神より受けたるキリスト教である」

５　二つのＪと非戦論

・１８８５年新島襄宛の手紙：「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です」

「二つのＪ」 ── イエス・キリスト(Jesus Christ)と日本(Japan) ── の関係

・「当時のキリスト教指導者は、明治人にふさわしいナショナリズム意識の持ち主であった。彼らは、キリスト教を近代国家としての日本の建設のための精神的基礎と確信していた」（土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社　１１６頁）

・日清戦争について義戦論（朝鮮の内政に干渉する清国と戦い、清国を啓蒙するのが日本の使命である。『日本人の天職』、「日清戦争の目的如何」）

・ベル宛の書簡：「<<義戦>>はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の<<正義>>を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります」と述べており、それは次のような戦争廃止論へと展開される」

・「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない」（「戦争廃止論」）

・聖書研究（平和主義）＋時代状況分析（科学者的な眼）

・「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10:16）

次の世代のキリスト教徒（矢内原忠雄）へ継承にも受け継がれて行く。

日本の平和運動に対する無教会キリスト教の寄与

６　ほんとうの繁栄とは、ほうとうの愛国とは

・日本民族の救いと繁栄を願う心、あるいは天皇への敬愛は内村において生涯変わらない。内村鑑三は民族主義者か？

・民族自体のために民族を愛するという地平から、正義のために民族を愛するという地平へ。

「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ: And All for God.」

（自選の墓碑名）

・愛国の意味の転換、真の愛国とは何か

農本主義的な小国主義　→　多元的世界の中のキリスト教、環境論的なキリスト教

「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少くないのであります、国の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません、否な、其の正反対が事実であります」、「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります」（「デンマルク国の話」『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫）。

＜文献＞

１．宮田光雄『平和の思想的研究』創文社
『日本の政治宗教　天皇制とヤスクニ』朝日新聞社
２．内村鑑三　『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』講談社文庫
『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫
３．関根正雄編『内村鑑三』清水書院
４．土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社